ti amo

rina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｉ　ａｍｏ

【Ｎコード】
Ｎ０６７１Ｎ

【作者名】
ｒｉｎａ

【あらすじ】
『また会う日まで』の続編です。
イタリアは、神聖ローマが着８てくれると信じて、ずっと待っていたが
なかなか現れず、顔も声もすべてわからなくなっていた・・・・・・・
そのことでもしかしたらもう神聖ローマを見つけられないと思ったイタリアは…

第一話「行方不明」（前書き）

これは『また会う日まで』の続編です。
前回はちびたりあ視点で、今度はイタリア視点になっています。
誤字や脱字があるかもしれませんが、そこはすみません（＞Δ＜；）

第一話「行方不明」

「イタリアが行方不明！！！！？？？」

それは突然のことだった……

イタリアが昨日から行方不明らしく帰ってきていないらしい。
イタリアの上司もいつもはイタリアは一日でも泊まる時は「泊まっていくよー」と
連絡をくれていたのに今回に限って連絡がこないのでこの前に行った日本に電話してきたのだ。
しかし日本の家にもその日に帰って行ったのでいなく、心配した日本は
ドイツに電話したのだ。

『はい。昨日私の家に遊びに来てたんですけど、今日上司の方から電話が来まして……≪イタリアがなかなか帰ってこないのだがまだそちらか？≫
と……やはりドイツさんのところにも来ていませんでしたか……』

ドイツの方にもイタリアは来ていない。ドイツは少し頭を掲げて考えた。

「あっあぁ……イタリアの事だからどこかふらついて女をナンパでもしてるんじゃないのか？？」

『それなら良いのですけどね。イタリアくん、どこにいるのでしょうか……』

「……あぁ、あぁ、分った。こちらからも見つかったら連絡する。またな」

『はい』

ガチャッ

ドイツは電話を切り深いため息をついた。

「イタリア……」

ドイツは少し不安になり外に出てイタリアを探すことにした。
それはもう2時を回った深夜の事だった。

……一週間後……

「イタリアが見つからん！！！！！！！！」

イタリアは一週間たっても帰ってこなかった。上司も最初は心配していたのだが
今では心配というより怒りに満ちている。顔を真っ赤にさせて足をドンドンと強く
踏み鳴らしていた。

「イタリアはなぜ帰ってこんのだ！！昨日の会議はドイツとの大事な会議だと
ちゃんと言っておいたはずなのに！！あいつはドイツの事になると絶対に約束は守る

奴だったというのに！！！！！！！……なぜなのだ……」

上司もやはり怒っていながらも心配しているらしい。途中下を向きごにょごにょと
なにか話している。

しかしそれ以上に心配性な物もいた。

「イタリア……イタリア……イタリア……あぁ！！イタリアの奴、どこに行ったんだ！！
一週間ずっと探したのに見当たらん！！！……お前は何処にいるんだイタリア……」

それはやはりドイツだった。
ドイツは一週間いろんなイタリアのいそうなところを探したが見つからなかった。
『見つからなかった』というより『見つけられなかった』というのが妥当かもしれない。
ドイツは今になって気付いたが、イタリアの事を分っているつもりでも
分ったいなかったのだ。

「今になって気付いたが……俺はイタリアの行く場所なんて全く知らない……
一番最初の友達で、いつも一緒で好きな食べ物も好きなことも全部知っていたつもりだったのに…
本当に『つもり』だったんだな……くそっ！！もっとイタリアの事を分っていたら！！」

ドン！！！！！！

ドイツは机を拳で強く叩いた。机には少しの罅が入り、上に乗っかっていた
沢山のビールが転がり床に落ちていった

「……何をしているんだ俺は……前まで人がいなくなるだけでこんなになる事なんて
一回もなかったのにな……」

ドイツはビールの缶を一つ一つ拾い、床にこぼれたビールを綺麗に雑巾で拭き取った。
そして掃除をしながらもイタリアの事を考えていて、一つ思いついた事があった

「そうだ……オーストリア！！！あいつなら分かるかもしれない！！」

あいつはイタリアが小さい頃から知ってるんだ。きっとあいつが行きそうなところも
分るかもしれないな……そうと分かればさっそく行くか！！

ドイツは頭の中で考えるとすぐさま行動し、オーストリアの家へといった。
以前よりはなんとなく活気があるような感じはする家へとなっている。
中からは美しいピアノの音色が聞こえてくる。

「オーストリアー、いるんだろ？ちょっとした相談なんだがいいか？？」

ドイツは玄関で思いっきり叫んだ。
すると奥の部屋からオーストリアがコツコツと靴の音を立ててやって来た
「来ると思っていましたよ…ドイツ……イタリアの事を聞きに来たのでしょう??」
「あっあぁ……じゃぁイタリアの居場所が分るのか!?」
ドイツは嬉しそうな声でオーストリアに話しかけた。
「……私にもイタリアの居場所は分りません……しかし……」
「しかしなんだ??」
「イタリアが一週間も居なくなるという事はもしかしたら……神…」
「神??なんなんださっきから早く言ってくれ!!」
ドイツは早くイタリアの事を探したくてソワソワしていた。
するとオースロリアは一息ついて言った。
「イタリアは多分神聖ローマの跡地に行ってるかもしれませんね」
「っえ?しかし俺が兄さんから聞いた話ではあの人の墓は埋め立てられて……」
「だからですよ。だからあの子はきっとその場所を一番に覚えているのです。
特に明日は神聖ローマが終わった日でもありますからね…絶対にま

た会おうと
言ってくれたからこそ失いたくないのですよ……」

ズキッ

ドイツにはオーストラリアの言葉がなぜか胸を突き刺した。

あいつの一番は俺だと思っていたのに……やっぱりあの人なんだな
…イタリア……
あの人はこんなに思ってくれているイタリアをこのままにしていて
いいと思ってるのか??
神聖ローマ…あなたは今イタリアをちゃんと見ているのか……??

「……オーストリア……」

「なんですか??」

「あの人の墓の場所はどこだ??」

「……はい??」

「今からそこに行ってくる!!!!」

「はい?今からですか??それは危険ですよ!!もう夜10時を回
ってるんですよ!?」

時計を見ると知らずのうちに10時を回っている。ここからイタリ
アのもとに行くには
さすがに危険すぎる。敵が攻めてくる可能性もあるからだ。

「それでも俺は行く、だったら余計に心配だからな。大丈夫だ……俺はそんなヘマはしないからな」

「……はぁ、あなたは言ったことは絶対に遂行しますからね……わかりました。場所は教えます。その代わりイタリアと無事に帰ってきてくださいね」

「あぁ」

ドイツはオーストリアから場所の地図を見るとオーストリアのもとを離れ
イタリアの元へと全力で走って行った。

「神聖ローマ……」

オーストリア　ウィーン

「イタリア――！イタリアぁぁぁ――――――――！！！！！」

ドイツはオーストリアの地図を頼りにオーストリアの中心部、ウィーンまでやってきた

ここは昔神聖ローマ帝国が終戦した場所でもあり、神聖ローマが亡くなった場所でもあった。
墓の真相を言うと、神聖ローマは帝国は完全に解体されて終焉を迎えた。しかし国は人ではない。
国で居続ける限り永遠に命があるものだが、名も、その土地もなく

なてしまうとその国の居場所
もなくなり消えてしまう。ローマ帝国もそうだったのだ。
神聖ローマ帝国がなくなった瞬間神聖ローマは消え、着ていた衣服
とイタリアのパンツだけが
残った。それをオーストリアが綺麗に洗い、たたんで箱に詰めると、
その場の土に埋め、墓を建てた。
これも自分の心情を納めると同時に、イタリアを少しでも悲しませ
ないために行った事だった。

しかしそれを好ましく思わないものもいた。数百年後その者たちが
そこをなにも了承していないのにも
かかわらずそこを平地にしてしまったのだ。それを聞いたイタリア
は急いでウィーンに向かった。
しかし時はすでに遅く、完全に平地となってしまったその場所には
墓なんて見当たらず、ただ
しけっている土が周りにあるだけだった。しかしよく見ると中心ら
へんに何か箱のようなものの
先が見えていた。イタリアは急いでそこにかけつけ、そこを急いで
掘り返すと、それは
やはり木箱だった。それを急いで取り出すと、少しカビついた匂いを
放っていたが、それはれっきとした神聖ローマの遺品だった。匂い
なんてお構いなしにそれを
抱きしめ、瞳からは涙が溢れ、声に出して大きく泣いた。
その後平地にした集団は捕まり死刑となった。怒ったオーストリア
の裁判のものが下したのだ。

イタリアは二日部屋から出てこないと思うと元気に笑顔で部屋から
出て来て

「ヴェ～今日もいい天気だねぇ、久しぶりにお掃除してオーストリ

アさん家を綺麗にしなくちゃ！」

と、デッキブラシを持って出てきた。しかしオーストリア達にはその姿は自分たちを心配させまいとただただ我慢して笑顔をふるまっているようにしか見えなかったのだ。時々誰も見ていないところで涙目になっていたイタリアだが、今は泣く事もなく自然に笑い、遊ぶこともできるようになっていた。

きっとドイツに出会う事が出来たからだろう。しかしだったらどうしてイタリアは急にここに来たくなったのか……

ドイツはイタリアを必死に探し続けた。時はもう１２時を回っていて、空は真っ暗で、星も見えなかった。

きっと雲行きが怪しい証拠だろう。それでも探していると、先の方に目が闇になれたのか

何かしている人の影が見えた。

もしや……

ドイツは足を早まらせ、急いでその場にかけつけた。そこにいた影は一気に起き上がり

「ヴェ――――――！！ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！お願いだから打たないでぇぇぇえええ！！」

「イタリアか！？俺だ！ドイツだ！！」

「……ヴェ？ドイツ……？？……何で……」

その声は確かにイタリアだった。ゆっくり近づいていくと、なにか黒い布か何かを持っていて、
涙を流したのか目が充血し、涙の跡が残っていた。

「探したぞイタリア……良かった見つかって……」

「ごめんドイツ……心配かけちゃって……」

「いや、もうそれはいい……お前が見つかったんだから…そかしなぜ急にここにきたくなったんだ??」

ドイツがイタリアの隣に座り尋ねると、イタリアはうつむきまた涙が出てきた

「……忘れちゃったんだ……」

「はっ?」

「忘れちゃったんだよ神聖ローマの顔!!写真はもう古くて見る事が出来なくて……俺ずっと待ってるって言ったのに……」

イタリアはもう数百年も昔で、神聖ローマの顔も声も分らなくなっていたのだ。
だからここに来れば神聖ローマに会えるかも知れないとずっと待っていたがやはり来なかったらしい……

ドイツは言う言葉もなく、ただただイタリアの話だけをうなずいて聞いていた。

「神聖ローマはね、俺がお腹が減って食べ物がないかさまよってた

時に自分のご飯をそっと置いておいてくれたんだ
……ちょっとまずかったけどね。でねでね、俺が蝶をとるために走ってたら石につまずいて泣き目になったんだ。
そうしたら「いっイタリア！大丈夫か？立てるか？？……俺の手に掴まれ」って手をさしのべたりしてくれたんだ…
だけど言葉は覚えてるのに声と顔だけが思い出せない…何でか分らないけど……」

「イタリア……」

ギュッ

「ヴェ？…ドイツどうしたの…？？」

ドイツは優しくイタリアを抱きしめた。

「……すまない…少しの間だけこうさせてくれ…」

「…ハハハ、ドイツが子供みたいだよ～…くすぐったいよドイツ～」

ドイツはイタリアがそんな事を言っている間、いろんな事を考えていた

ーーーーーイタリアは何百年も神聖ローマの事を待っていたのに全然現れなくて忘れてしまったのに
それでも待ってるんだな…こいつはバカだが約束は絶対に守る奴だ…だから優しくしてくれた、
好きだった奴の約束はどんな事があっても守りたいんだろう……神聖ローマ…どうしてあなたは
出てこないんだ…こいつはこんなにも頑張って待っているのに…少

しでもいいから出て来てくれ…！！ーーーーーー

ギュッ

ドイツはさっきよりも少し強めに抱き、ずっと願った。
すると周りが一気に明るくなり二人は目をキュッとつぶった。

「なっなんだこの光は！！！」

「わぁぁ！明るいよ～！！！！」

第一話「行方不明」（後書き）

次で終了になります。
まだまだ未熟者ですが、なにとぞ続きも
よろしくお願いします。

第二話『Ｐｅｒ　ｓｅｍｐｒｅ…』（前書き）

最終話です。
ここまで見ていただきありがとうございます。

第二話『Ｐｅｒ　ｓｅｍｐｒｅ…』

周りが光に包まれ、ドイツが薄眼で周りを見ると、さっきまでいた場所とは違う、
周りが全部何かに包まれたような黄色いふわふわした空間にいた。

ドイツは目をぱっちり開けた。

「イタリア、もう目を開けてもいいぞ…なんだかここは懐かしいような…
そしてなんだか心が安らぐような場所だな…」

「うっうん……けど……なんかここ……あっ！！！！！」

イタリアが急に声を荒あげて立ち上がった

「どうしたんだイタ…」

イタリアはドイツの言葉を聞いてはいなく、その言葉に口を挟むように言った

「……ローマ…」

「っえ??」

イタリアはどこかに走り去って行った。走る瞬間に大粒の涙を流して…

「神聖ロ――マぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「なっイタ…あの人なんか見当たらないぞ…あいつにだけ…見えるのか…??」

イタリアは走り去ってドイツの見えないところまで行ってしまった

「…あいつの再開を俺がじゃましていいものじゃないよな…」

ドイツはその場で胡座をかきそのままいろいろと考え込んだ。

一方イタリアはずっと走って、急にその場に止まった

「神聖ローマ…だよね……ずっと…ずっと待ってたんだよ…??どうして今まで出て来てくれなかったの??」

そこに神聖ローマはいた。なぜかイタリアにだけ見えるらしいが、もしかしたら強く『会いたい』と思った人だけが会えるのかもしれない…イタリアはそっと神聖ローマに近づいた。

もう何百年もたち、イタリアは大きくなって神聖ローマがなんだか子供のように見えてくる…

《悪いイタリア…あとここに入れる時間も少ないんだ…だぶん会えるのもこれが最後だ……》

「っえ?これが最後って……もう会えないの…??やだよそんなの…神聖ローマぁ・・・」

堪え切れない涙を流してイタリアは地面にペタリと膝をついて泣いた…

《……イタリア…ドイツは好きか??》

急に質問されてイタリアは少し涙が止まり、その質問にはきちんと答えた

「…うん大好きだよ〜、ちょっと怖いけど優しいし頼りになるし…ドイツは俺の事どう思ってるのか分らないけどね」

《あいつもお前の事が大好きだ…好きじゃなかったら一週間もずっとお前を探し続けるわけがないだろ??》

「えっ?そうなの…??」

イタリアは心の中で「ドイツ心配かけてごめん…探してくれてありがとう」とお礼を言った。

《…だからあいつを大切にしてやってくれイタリア…あいつは俺の孫みたいな奴だからな……
あいつの中にちゃんと俺はいる…いつでもお前を見てるから……だから心配しないでくれ…
だからもう俺の事で泣いたり、待ってたりしないでくれ…あいつがどうしていいか分らなくなるからな…》

「……うん、分ったよ神聖ローマ!俺もう迷わない、神聖ローマはドイツの中にいるんだよね!!
俺、ドイツも神聖ローマも同じくらい大好きだよ!!だから二人が一つになって俺と一緒にいてくれる…
だったら俺もうドイツを心配させたりしないようにちゃんとするよ!!頑張るよ!」

《そのいきだイタリア！》

そういうとだんだん神聖ローマが薄くなってきた…もう時間なのだ…
また前のように消えてしまうのだ…

《……時間みたいだイタリア…お前とちゃんと話せてよかった……
お前の言うとおり、強くなりすぎると滅びやすいものだな……イタ
リアが俺と神聖ローマ帝国にならなくて良かったと今は思ってるぞ…
今まで待っててくれてありがとう…そして最後のさようならだイタ
リア…》

「神聖ローマ…俺も神聖ローマ帝国にならなくて良かったと思う反
面…なればよかったって思ってた…
もう会えないくらいだったら神聖ローマ帝国になって一緒に滅べれ
ばとも思ったよ…だけどそれは違うよね…
俺、ちゃんと神聖ローマの分まで生きるよ……だから……さよう
なら……ありがとうね神聖ローマ…」

イタリアは涙をぐっと堪えて右手を優しく振った

《あぁ…ドイツをよろしく頼むぞ…イタリア……あいつの中でもず
っとお前だけを見てるからな…
大…き…ぞ……イ……》

ポンッ

最後の言葉はイタリアにはちゃんと伝わった。神聖ローマが急に消
えたと思うと黄色い光の魂となって
ドイツのもとへと飛んで行った…見えなくなったと思うと急に周り

が暗くなり、さっきまでいた場所とは思えなくなっていた…

「バイバイ…神聖ローマ……」

ーーーーイタリア……月明かりに約束したこと…覚えてるか？？？………

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「イタリア…」

「なぁに？神聖ローマ？？？」

二人はテラスに置いてある椅子に向かい合わせで座っていた。このときは満月で、夜空がとてもきれいだったので神聖ローマがイタリアをさそったのだ。

「きっ今日の夜空はきっ綺麗…だな！」

「うん、そうだねぇ～、なんだかあのお月さまが凄く近くにあるように思えるよぉ～」

「あっあぁ…そうだな…でな…イタリア………」

「？？」

「俺は……・・・・数日後・・・ここを出るんだ…理由は…言えない…」

「えっ？出るって……神聖ローマどこに行くの？僕嫌だよ、やっと神聖ローマと仲良く慣れたのに…」

イタリアは少し泣き目になって、目元に手をこすった

「すっすまない…けどなイタリア…男はやる時はちゃんとやらなきゃいけないんだ…

俺も本当は行きたくない…ずっとここにいたいさ……だから……俺がもしまたここに

戻ってくることができたら…なっなっなま！！！！」

「なま？？？」

イタリアはいつの間にか涙が止まり、首を横にかしげた

「なっなっなっ・・・・・・ごくっ…はぁ・・・・・・・お前の…

イタリアじゃない…本当の

名前を教えてくれないか？？？？？？」

「本当の名前？？そんなの今だって言えるよ？僕の名前はフェｒ・・・」

「言うな！！！！！！！」

「！！」

イタリアが名前を言おうとした瞬間、神聖ローマが急に声をあげて

叫んだのでイタリアは

驚き無意識に涙が出て来た

「あっ！嫌…すまない……ただ、約束をしておきたかったんだ……
…そんな約束でもしないと
帰ってこれるかわからなくなるかもしれないんだ……」

「……わかった…その代わり、神聖ローマの名前は先に教えてくれないかな？？
僕、神聖ローマが帰って来たらその名前でちゃんと呼びたいの～」

「わかった・・・・・俺の名前は『神羅』だ」

「神……羅……わかったよ。絶対、絶対に帰ってきてね！！！」

「あぁ！！」

――――――――――――――――――――――――――――――――約束守れなくて…ごめんな？……
……
ちゃんと国として……ちゃんと帰ってきたかった……ごめんな
……――――――――――――――――

空を見上げてそう言うと、さっきまで星一つ見えなかった夜空が
沢山の星が見えるとても綺麗な夜空へと変わり、空からキラキラと
暖かい小さい星の形をした物が優しく降ってきた

「……きれい…だな……」

「？？……ドイツ……うん、そうだね……本当に綺麗だ」

「きっとあの人が見せた最後のお前へのプレゼントなんだな…」

「……うん……そうだね」

イタリアはそれを聞くとまた涙が出てきそうになって、下を向きドイツを不安がらせまいと
我慢しようとした。すると、ドイツは優しく後ろからイタリアを抱きしめた

「…ドッドイツ…？？」

「お前の悲しみは良く分かる…だから今日一日くらい泣いてもいいんだ。また明日から笑顔でいればいい。だから我慢なんかしなくていい……今だけ思いっきり泣け……」

するとイタリアの方がヒクヒクと動き、地面に涙がポツンッと落ちていった

「ドッドイ……わぁぁあああああん！！！！！！！！！！」

イタリアはドイツの方を向き、その胸元で大粒の涙を流して泣き続けた。
その間ドイツは優しくイタリアを包み、泣きやむまでずっとそばにいた……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー俺がこいつを支えてやらないとな

……ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

二時間後…

「ひっく、ひっく…ヴェ゛〜…ひっく……」

「……大丈夫か？…まぁ二時間も泣いたら声はかれるよな……」

「ごっごめ〝ドイ〝ツ〝……ひっく…ずっ、ずっ……服、こんなに汚しちゃって……」

ドイツの服を見ると、外側と内側の色が酷く違い、涙でぬれてビショビショになっていた

「あぁ……これか、別にいいさ、一応軍服だから下のシャツまでは濡れてない。これを脱げばすむ話しだ」

ドイツは軍服を脱ぎ、白いシャツ一枚になった

「ありがとうね…」

イタリアは涙を袖でごしごしぬぐい、ドイツからもらったティッシュで鼻をかむと一気に立ち上がり

バッ

「もう大丈夫であります！！！」

イタリアはビシッと敬礼をした。その姿は、もう朝で太陽が昇っているせいなのか、

光がイタリアにさし、少しだけカッコよく見えた

「そうか…じゃぁ最後にあの人のお墓があった場所にに挨拶して帰るか」

「はいであります！！」

するとドイツも立ち上がり、お尻についた土埃を払い神聖ローマのもとへと歩いて行った。
その場に着くと、イタリアはしゃがみこんだ

「神聖ローマ…今までずっと俺の事を見ててくれたんだよね…情けない奴でごめんね…ありがとう。
これからは俺まっすぐ前を向いていくよ！！神聖ローマにもドイツにも心配かけないようにする！！
……まぁドイツには時々凄い世話やかせちゃう事もあるかもしれないけどね」

「それはなるべく勘弁してくれ……」

「分ってるよ！大丈夫、なるべくだね！！」

……お前のなるべくが俺には凄く怖いんだがな……

「？どうしたの？ドイツ」

「あっ、いや何でもない…」

「そうなの？ならいいんだけどさ…ドイツも最後だし神聖ローマに挨拶しようよ！」

「あぁ、そうだな」

ドイツもしゃがみこみ、何を見ているのか正面を向き

「神聖ローマ…あなたは俺の中で生きてるんだよな…だったら俺とイタリアをずっと見ていてくれ…
俺らは戦争や何やらで喧嘩する事もあるかもしれない…間違えた道にいくかもしれない…その時は
あなたがまた俺たちを導いてくれ……」

「ドイツ…」

ギュッ

「っえ？」

イタリアは急にドイツの手を握って上へと上げた

「神聖ローマ、俺、ドイツが好きだよ！大好きだ！俺ドイツとはずっと一緒にいたい。だから…
ずっと見守っててね……あのときの約束覚えてる？？帰ってきたら俺の名前を教えるって言ったよね…
俺の名前は『フェリシアーノ』……『フェリシアーノ・ヴァルガス』だよ・・・・・・俺のために
帰ってきてくれてありがとう…大好きな神…羅…」

「……」

「ははっ、なに言ってんだろオレ…早く帰ろうドイツ！！オースト

リアさんからここ聞いたんでしょ？
じゃなきゃここの場所が分るわけないもん。心配してるだろうしさ
！！」

「そうだな」

二人は手をつないだまま走り、イタリアが乗ってきた車で、凄い勢いでオーストリアのもとへ
突っ走っていった。

ーーーーーーーーーーーーずっと見守っている…お前たちを…ありがとう……フェリシアーノ……ーーーーーーーーーー

………この声はイタリアの耳へと届いたのだろうか…
いや、届いていないとしてもイタリアは感じてくれたかもしれない………

その後、イタリアとドイツはオーストリアに会いに行ったが、
イタリアはこっぴどく叱られたが、最後はオーストリアさんが優しく頭をなでて『ごくろうさま』と言ってくれた。ドイツはなぜかイタリアの上司に過激なスキンシップを取られた。

「ねぇドイツ…」

「ん？どうしたイタリア…」

説教が終わり二人はテラスにいた。イタリアはドイツと真正面から見あって、笑顔で言った

「ありがとうね、今回は本当に嬉しかった」

「！！」

あまりに急だったのでドイツは驚き少し顔を赤らめて持っていたビールを落としてしまいそうになった

「俺、ドイツがいなかったら今頃どうなってたか分らなかったもん…だからありがとう…」

「おっ俺はただ、お前のところの上司がいつも俺のところに押しかけてきてうるさかったから
探していただけで…ただの気まくれだ！！」

「はははっ」

ドイツは『さっさぁ、俺らはまだ一睡もしてないんだから寝るぞ！！明日の会議に備えないとな』と
恥ずかしさをごまかすように早歩きでその場を経った。イタリアはそれがなんとなく面白くて笑いながら『はーい』と答えてドイツについていった。

神聖ローマはもういない、それはもう昔から分り切った事だった。
だけど『また会おう』と言ってくれたあの言葉を信じたかった…いや信じていたかったんだ……
初恋で、何もかも初めてで、怖くて逃げたり隠れたり色々してたけど、
それでも優しくしてくれる神聖ローマが大好きだったから……
だけどこれからは神聖ローマの影だけを追ってはいけない、自分は前に進まないといけないんだ……
だからこれで最後だから神聖ローマ…俺が一歩踏み出そうとする時は優しく背中をったいて俺を
助けてね……

ぐっ……そうだ前に……前に進むんだ俺は!!

ぽんっ

「っ…っえ??……今のって……もしかして…!!」

「イタリア―!!早く来ーい!?」

「はっ、いっ今行くよ――!!!」

イタリアは急いでドイツのもとへかけて行った

――――――――――ありがとう・・・・・『新羅』・・・・・
――――――――――

| E N D |

第二話『Ｐｅｒ　ｓｅｍｐｒｅ…』（後書き）

どうだったでしょうか？？？
自分が書くとちょっとシリアスものになってる気がする…ｗｗ
でもそんなの気にしない！！
あと、これにはおまけがあります。
それも見ていただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0671n/

ti amo

2010年10月9日20時34分発行